

授業を終えて

学校教育・伴野昌弘

1・授業の概要と工夫

本年は、最終授業故、工夫の総括として、学生にとって、教育現場に即応した教育史的教養が、より一層身に付くよう徹底した。さて、本授業は、教育学部の2回生を対象とした(3・4回生も受講可能)教科専門科目(選択必修)である。受講生の殆どの者は、3回生で教育実習を行うので、上にも記したが、本年も教育実習に即応し役立つ「教育思想史概論」を視野に、シラバスに示した授業目的(「欧米の人物中心にその教育思想の読解を通して、歴史から学ぶ態度を体得し、教育という営みの現実性かつ理想追求性に関わる深い教養を身に付ける。」)が達成されるように15回の授業項目に則して講義した。以下三つの到達目標を記し、授業を概観しよう。

到達目標(1)「教育学研究の広範な枠組みの中で、教育思想史を位置付け、意味付けることができる。」これは、授業の第1回(オリエンテーション)に対応した。即ち、教育学の一部門たる教育思想史とは何か、またそれを学ぶ意味を根本的に考察した。本年度の工夫として、歴史を学ぶ教育的意義を、特に身近な問題から双方向的に考えた。(松山のロシア人墓地のVTRを見せ、実際に見学させ、好評を得た。)

到達目標(2)「広範多岐に亘る教育思想史を、代表的な人物と学説を中心に、その基礎的な文献読解を通して理解する。」これは授業項目の第2回から第13回に対応し、本講義の中軸である。ただ、取り上げた人物が本年も多岐に亘り、時間的に十分な文献読解にまで至らなかった点が悔やまれる。(主な資料は配付したが・)

到達目標(3)「現代社会の教育的諸問題の解決のために、各自それぞれテーマを設定し、上記(2)の考察を基にその解決法の端緒的追究を試みる。」これは、授業項目の第14回とレポートの課題に対応し

た。単なる机上の学問とならぬためにもこの観点は重要であり、学生は各自、主体的に作業を進め、貴重な探究を試みた。因みに本年度受講生(14人)の興味関心によって取り上げられた人物とその人数は次の通りである。ヘルバルト(3人)、ルソー、ペスタロッチ(各2人)、プラトン、コメニウス、ロバートオウエン、モンテッソーリ、デューイ、森有礼(各1人)。また、現代の社会的教育的関心事では、ゆとり教育、いじめ、体罰、、平和教育、教員免許更新制、等が取り挙げられた。

2・学生達の反応

本年も授業全般に関わる感想、意見、印象的な点を自由に記してもらったが、主なものを次に記しておこう。

①ロシア人墓地の意味と解説、現地見学とVTRが大変印象的であった。②歴史を学ぶ面白さを知った。特にクリスマス会は、楽しく、教育史の勉強にもなった。③クリスマスの意味を初めて知り驚いた。④時に教科書を超えて、先生の経験(子育てなど)から真実を語る姿勢に共感した。貴重で分かり易く、今後も続けて欲しい。⑤先生の平和の話、思想が心に残る温かい授業だった。

3・総括と反省

授業内容に関しては、学生達の反応は、例年、上記のように概ね肯定的であり、興味深く受講できたようだ。授業方法に関しても、板書の在り方など特に問題はなかった。

ただ授業を終える担当者として、よりよき授業に向けて、今後もし可能ならば、板書の意味を伝えると共に、より見易い板書を心掛けたい。また学校現場に即応できる経験となるために、授業内容に応じて学生と(或いは学生同志で)話し合う双方向的授業をもっと検討すべきだったと反省している。。

その意味でも、座学ではなく、実践的な「教育思想史概説」として、来年度以降も、是非、「ロシア人墓地」見学があればと期待する。